

魔魅人条例の制定に関する一資料

中山光勝

解題

明治三（一八七〇）年十二月二十七日¹、明治政府が全国に施行すべく頒布した最初の刑法典である新律綱領は、これが制定機関であつた刑部省自身が「明治ノ本律ニ非ス……罪囚、停滯ナカラシメ百代ノ準繩不朽ノ成憲ハ仍ホ漢洋諸律ニ酌量シ爾後緩ニ撰定致シ度候」と記していること²やその名称が「綱領」とされていることなどからも明らか³なように「所謂律ノ大綱ニシテ方変ノ罪状以テ尽スニ足ラ」³ざる暫定的刑法典であつた。したがって新律綱領施行直後より部分的改正や追加あるいは太政官指令や司法省指令の形式でなされた新律綱領の条項に

対する一種の有権解釈などがしばしば行われた。⁴

ところで、私は、さきに「新律綱領の典拠について」

なる小稿において、新律綱領・人命律上・魔魅人条の

凡魔魅ヲ行ヒ。符書ヲ造リ。呪詛シテ。人ヲ殺サン

ト欲スル者ハ。各謀―殺ヲ以テ論ス。止タ人ヲ疾苦

セシメント欲スル者ハ。謀―殺―已―行―未―傷ニ。

二等ヲ減ス。

なる規定が、清律例・刑律・人命・造畜蠱毒殺人条中の

若造魔魅符書呪詛欲以殺人者（小註略）各以謀殺

（小註略）論……欲（止）令人疾苦（小註略）者減

（謀殺已行未傷）二等

なる規定に準拠して制定されたものであることを指摘し、⁷

また、「熊本藩における『清律例彙纂』訓訳経緯とその

意義」なる小稿においては、同条の不備を補うための追加法として、明治六年四月十三日、太政官指令の形式で制定された魔魅人条例も、直接典拠とされた清律例の条項を特定することはできなかったが、清律例と密接な関係⁽⁸⁾を有するものであることを指摘したことがある。後者については、主として内閣記録局編『法規分類大全』刑法門二・刑律二にもとずいて記したのであったが、その後、国立公文書館蔵『公文録』を調査した折、この魔魅人条例の制定にかかわるより詳しい資料に接することができたので、ここに簡単な問題を附して翻刻し、前掲拙稿の補遺としたい。⁽⁹⁾

国立公文書館蔵『公文録』明治六年四月・司法省
伺・十四

教部省は、明治六年一月十五日、各府県に対し、同省達第二号をもつて、「梓巫市子憑祈禱狐下ケ等の所業禁止の件」を発し、

従来梓巫市子並憑祈禱狐下ケ杯ト相唱玉占口寄等之所業ヲ以テ人民ヲ眩惑セシメ候儀自今一切禁止候条

於各地方官此旨相心得管内取締方嚴重可相立候事

として、「人の無知と弱さにつけこみこれに寄生する市井のいわゆる『おがみ屋』ないし『おがみや』類似の行為⁽¹⁰⁾」を厳禁していた。けれども、当時の現行刑法である新律綱領は、前述のごとく人命律上・魔魅人条において、殺人あるいは傷害の故意で迷信的手段を用いて事実の実現を企図した場合についてのみ、これを処罰の対象とし、それ以外の場合については何らの処置もとてはいなかったし、また、この規定以外にかかる宗教犯罪を防遏する刑罰法令も存在しなかった。⁽¹¹⁾

ここに紹介する資料は、かかる法制の不備を是正するため、僧巫などの宗教教師が、精神障害者を治療するため宗教行為として加持祈禱をおこない、その結果、人を死傷させた場合の処罰規定を清律例・礼律・祭祀・禁止師巫邪術条や同・刑律・賊盜・造妖書妖言条などを参考にして、新たに条例を制定したいとして、明治六年三月二十九日、司法大輔福岡孝第および司法卿江藤新平が連名で正院（太政官）に提出した条例案を添附した司法省伺⁽¹²⁾、これを受けた正院（太政官）の推問に対し、同三月三十一日、左院が正院（太政官）に提出した上達書⁽¹³⁾、左

院の上達書に附された「付紙」に對し、同四月十日、前回同様、福岡、江藤の連名で正院（太政官）に提出した司法省再伺²⁰およびこの二度にわたる司法省伺に對し、同四月十三日、正院が司法省に對し發した指令の計四点の資料である。これらの資料の中、三月十九日の司法省伺および四月十三日の正院（太政官）指令については、前掲『法規分類大全』第五十四冊・刑法門二・刑律二に掲載され、すでに紹介されていたところであるが、三月三十一日の左院上達および四月十日の司法省再伺については、この『公文録』所載の資料によりはじめて明らかにするものである。これにより新律綱領の不備を補うために追加法として制定された条例の成立過程が一ヶ条ではあるがより明白になったことは疑いのないところであろう。

さて、このようにして成立した魔魅人条例ではあったが、二ヶ月後の明治六年六月十三日、新律綱領の改正、追加法を集大成し、条文体にまとめた刑法典である改定律例が、太政官布告第二百六号をもって頒布され、同七月十日から施行されたことによりその効力が否認されてしまった。²¹すなわち太政官布告第二百六号には

今般別冊改定律例ヲ頒布候条來ル七月十日ヨリ一般施行可致就テハ……従前單行頒布ノ律例及ヒ律案指令等モ一切同日ヨリ援引不相成綱領新例ニ正条無之者ハ更ニ可伺出……此旨相達候事

とあり、「新律綱領の追加法である太政官布告、太政官指令、司法省布達、そしてまた有権解釈を行った太政官指令等は、一切その効力が否定され、廃止された」²²からである。しかも、改定律例中には、この魔魅人条例は編入されることがなかったため、改定律例施行以後は、いわゆる「おがみ屋」ないし「おがみ屋」類似行為による殺傷を処罰する規定は存在しなくなり、魔魅人条例制定以前の狀態にもどったことになったわけである。もともと当時の刑事法は、新律綱領にしても、改定律例にしても、罪刑法定主義の原則によっていたわけではないので、新律綱領や改定律例に成文のない犯罪であっても、各府県の刑事裁判担当機関が、司法省や太政官の指令をあくまで処断することも可能ではあったが、そのような場合であっても、指令をあおぐべき量刑同などを作成するには不便を感じたことと思われる。しかしこれ以後、明治十五年一月一日、新律綱領、改定律例にかわる刑法典と

魔魅人条例の制定に関する一資料（中山）

していわゆる旧刑法が施行され、傷害致死や過失致死傷の規定が整備されるまで、魔魅人条例にかわる刑罰法令が制定されることはなかった。²⁾

(1) 新律綱領の頒布日については、十二月二十日、同二十一日、同二十七日の三説がある（手塚 豊『新律綱領の施行に関する一考察』『明治刑法史の研究（上）』手塚 豊著 集第四巻・昭和五十九年・慶應通信・五十二頁）が、ここでは一応、手塚博士に従って（手塚 豊『新律綱領、改定律例注釈書』前掲『明治刑法史の研究（上）』一八三頁）二十七日のこととしておく。

(2) 「明治三年七月十八日、刑部省伺」内閣記録局編『法規分類大全』第五十四冊・刑法門二・刑律二（明治二十三年・内閣記録局）一九四頁。

(3) 「明治五年七月日欠・司法省伺」前掲『法規分類大全』第五十四冊・刑法門二・刑律三・三〇九頁

(4) 新律綱領の改正、追加の様式などについては、手塚 豊『明治六年太政官布告第六十五号の効力』前掲『明治刑法史の研究（上）』一一七―一二五頁参照。

(5) 新律綱領の引用は、いわゆる「官版」により、条文名に附された返り点や一二点および条項中の語句の左側に附された傍註は、これを省略した。なお、官版新律綱領については、手塚・前掲『新律綱領、改定律例注釈書』一八一―

一八二頁、一八四―一八五頁参照。なお、当時は、このようないわゆる迷信犯が広くおこなわれていたとおぼしく、

『司法省日誌』明治九年第二号・一月九日条には、

（小田県伺）^{八月十日}

第一条 人命律凡魔魅ヲ行ヒ符書ヲ造リ呪詛シテ人ヲ殺サント欲スル者ハ各謀殺ヲ以テ論ストアリ抑魔魅符書トハ何ソ方法アリテ妖術ニテモ有之事ニ候哉或ハ狐狸ノ属ヲ使ヒ現ニ人ヲ疾苦セシムル実験ニ依テ魔魅ト称ハ候儀ニモ可有之乎又ハ妖術魔法ニ由ルト由ラサルト実験ノ有ルト無ルトニ拘ハラズ頑愚嫉妬ノ執念ヨリ神仏ニ憑テ呪詛スル者ハ一概ニ比条ニ依テ処断可然哉

（中略）

指令

第一条 魔魅呪詛等ノ事史伝ニモ散見スト雖モ其方法及ヒ実験ノ有無ニ至テハ現ニ其事実ニ就クニ非サレハ審明シ難シ頑愚嫉妬ノ念ヨリ一時呪詛スル者ハ一概此律ニ依ル可カラス

とみえる（日本史籍協会編『司法省日誌』十八・明治九年一・二月（昭和六十年・東京大学出版会）一二一―一六頁）。

(6) 清律例の引用は、宋祥瑞主編・沈之奇輯註・洪崇山增訂『大清律輯註』北京大学図書館蔵善本叢書・明清史料叢編（一九九三〓平成五年・北京大学出版社）を利用し、小註は、（一）内にいれた。

(7) 中山光勝『新律綱領の編纂の典拠について』『明治初期

刑事法の研究」(平成二年・慶應通信)六三頁。

(8) 中山光勝「熊本藩における『清律例彙纂』訓訳経緯とその意義」前掲『明治初期刑事法の研究』二七頁。

(9) 前掲『法規分類大全』第五十四冊・刑法門二・刑律二・二三八頁。なお、岡塚郎編『日本近代刑事法令集』上・司法資料別冊第一七号(昭和二十年・司法省秘書課)五三二・五三三頁にも魔魅人条例制定に関する資料が、本書により記されている。

(10) 「僧巫呪詛ノ儀ニ付伺」国立公文書館蔵『公文録』明治六年四月司法省伺。

(11) 翻刻にあたり、漢字は、人名等の固有名詞をのぞいて現代一般に使用されているものに改め、合字、変体仮名などについても普通のものに改めた。また、(一)内は、すべて中山の註記である。

(12) 上田本昌、高橋堯昭、町田是正、望月海淑の四教授の退休を記念する本号に寄稿するについては、四教授の専攻分野との関連を考え、一文を草するべきではあるが、もとより、四教授と専攻を異にする私にそのようなくわだては不可能なことである。そこで、私にとつて、長年の関心の的となつてゐる明治の律令ともいふべき新律綱領の研究に関する一文を草することとした次第である。不敏の小稿ではあるが、長年御教導を賜つた四教授の退休を惜別する記念としたい。

(13) 文部省文化局宗務課監修『明治以降宗教関係法令類纂』

(昭和四十三年・第一法規)一五六頁、ちなみに、この禁令以外にも、教部省は、明治七年六月七日、各府県に対し、同省達第二十二号をもつて「禁厭折禳をもつて医薬を妨ぐる者取締の件」を発し、

別紙乙第三十三号ノ通神道諸宗管長へ相達候条向後禁厭折禳ヲ以医薬等差止め政治ノ妨害ト相成候様ノ所業致候者有之候ハ、於地方官取締可致此旨相達候事

とし(前掲『明治以降宗教関係法令類纂』一五七頁)、同日、神道諸宗管長に対し、同省達乙第三十三号をもつて同じく「禁厭折禳等は執行差支なきも、医療を妨ぐべからざる件」を発し、

禁厭折禳等ノ儀ハ神道諸宗共人民ノ請求ニ応シ從來ノ伝法執行候ハ元ヨリ不苦筋候処間ニハ之レカ為メ医療ヲ妨ケ湯薬ヲ止メ候向モ有之哉ニ相聞以ノ外ノ事ニ候抑教導職タル者右等貴重ノ人命ニ関シ衆庶ノ方向ヲモ誤ラセ候様ノ所業有之候テハ朝旨ニ乖戾シ政治ノ障碍ト相成甚以不都合ノ次第ニ候条向後心得違ノ者無之様屹度取締可致此旨相達候事

として(前掲『明治以降宗教関係法令類纂』一五七頁)、宗教行為による医療妨害を禁止している。なお、法令の件名は、前掲『明治以降宗教関係法令類纂』の記載するところにしたがった。

(14) 昭和三十三年十月十四日に発生したいわゆる「線香護摩加持祈祷事件」に対する昭和三十五年五月七日・大阪地方

魔魅人条例の制定に関する一資料（中山）

裁判所判決（大塚重夫編『宗教関係判例集成』2・政教分離・信教の自由《昭和五十九年・第一書房》五二二頁）。

(15) この点について、木村 茂「所謂『梓巫、市子』等について」は

新律綱領中には

厭勝鬼魅ノ術ヲ行ヒ符書ヲ造リ呪詛シテ人ヲ殺サントシ或ハ人ヲ苦シメントスル者ハ懲役八十日ヨリ斬ニ至ル

と定めてある。

と述べている（宗教行政研究会『宗教行政』第十二号・昭和十一年・宗教行政研究会・三三頁）が、新律綱領中に、かかる規定をみいだすことはできない。そもそも「懲役」なる刑名は、明治五年四月日欠・太政官第百十三号布告（いわゆる「懲役法」）により定められたものであり新律綱領制定当初には存在しないものである（前掲『法規分類大全』第五十四冊・刑法律二・刑律二・一九八一—一九九頁）。なお、高木宏夫「宗教法（法体制準備期）」鶴飼信成・福島正夫・川島武宜・辻 清明編『講座日本近代法発達史』等7巻（昭和三十四年・勁草書房）一六頁は、木村説をそのまま祖述している。

(16) 清律例・札律・祭祀・禁止師巫邪術条には、

凡師巫仮降邪神書符咒水扶鸞禱聖自号端公太保師婆（名色）及忘称弥勒仏白蓮社明尊教白雲宗等会一応左道異端之術或隱藏圖像燒香集衆夜聚曉散佯修善事煽惑

人民為首者絞（監候）為従者各杖一百流三千里○若軍民裝扮神像鳴鑼擊鼓迎神賽会者杖一百罪坐為首之人○里長知而不首者各笞四十其民間春秋義社（以行祈報者）不在此限

と規定されているが、後述する魔魅人条例の直接の典拠となつたような文言はみあたらない。また、本条に附された条例の中にも直接該当する規定はみあたらない。

(17) 清律例・刑律・賊盜・造妖書妖言条には、

凡造讖緯妖書妖言及佞用惑衆者皆斬（監候被惑人不坐不及衆者流三千里合依量情分坐）若（他人造伝）私有妖書隱藏不送官者杖一百徒三年

と規定されているが、本条にも、後述する魔魅人条例の直接の典拠となつたような文言はみあたらないし、また、本条に附された条例の中にも直接該当する規定はみあたらない。したがって司法省伺が「清律ノ師巫邪術及ヒ妖書妖言等ノ罪絞斬ニ処スル律ニ依リ別紙条例ヲ起シ」と記していることは理解に苦むところである。

(18) 司法省は、明治四年七月二十九日に制定された「太政官職制並事務章程」中の

右院職制

諸省長官 次官

当務ノ法案ヲ草シ諸省ノ議事ヲ審調スルヲ掌ル

（中 略）

右院事務章程

右院ハ各省ノ長官當務ノ法ヲ案シ及ヒ行政實際ノ利害ヲ審議スル所ナリ各省長官次官之ニ任ス

なる規定（内閣記録局編『法規分類大全』第十九冊・官職門・官制・左院・右院（明治二十四年・内閣記録局）二九頁）および

正院事務章程

（中略）

凡ソ立法施政司法ノ事務ハ其章程ニ照シテ左右院ヨリ之ヲ上達セシメ本院之ヲ裁制ス

なる規定（内閣記録局編『法規分類大全』第十冊・官職門・官制・太政官内閣一（明治二十二年・内閣記録局）一四七一四八頁）ならびに明治五年八月三日に制定され、同九月一日より施行された「司法職務定制」中の

第三章 本省章程

本省総判スル所ノ事務章程左ノ如シ

第七条 新法ノ議案及条例ヲ起ス

（中略）

以上各条必ス上奏制可ヲ經テ然ル後ニ施行ス

なる規定（内閣記録局編『法規分類大全』第十四冊・官職門・官制・司法省一（明治二十三年・内閣記録局）一〇九一一一〇頁）などにもとづき魔魅人条例を起案し、正院（太政官）に伺い出たものであらう。なお、伺中にみえる「本年一月教部省禁令」とはいうまでもなく前述の「梓巫市子憑祈禱狐下ケ等の所業禁止の件」のことである。この司法

魔魅人条例の制定に関する一資料（中山）

省何に對し、正院（太政官）は、前掲「太政官職制並事務章程」中の

正院事務章程

（中略）

凡ソ立法施政司法ノ事務ハ其章程ニ照シテ左右院ヨリ之ヲ上達セシメ本院之ヲ裁制ス

（中略）

右院ヨリ上ル奏事議員ノ公論ヲ採ルヘキ者ハ左院ニ下シテ當否ヲ議セシメ其可否ヲ審判シ前条ノ例（之ヲ可トセハ其奏書ニ鈐印シ制可ヲ得レハ其証印ヲ押シ然ル後主任ニ付シテ之ヲ処分セシム——中山註）ニ從テ之ヲ処置ス

なる規定（前掲『法規分類大全』第十冊・官職門・官制・太政官内閣一・一四七一—一四八頁）などにもとづき、これを左院に下附したものと思われる。

（19）左院は、前掲「太政官職制並事務章程」中の

正院事務章程

（中略）

凡ソ立法施政司法ノ事務ハ其章程ニ照シテ左右院ヨリ之ヲ上達セシメ本院之ヲ裁制ス

（中略）

右院ヨリ上ル奏事議員ノ公論ヲ採ルヘキ者ハ左院ニ下シテ當否ヲ議セシメ其可否ヲ審判シ前条ノ例ニ從テ之ヲ処置ス

魔魅人条例の制定に関する一資料（中山）

なる規定（前掲『法規分類大全』第十冊・官職門・官制・太政官内閣一・一四七一―一四八頁）および明治四年十二月二十七日に改定された「左院事務章程」中の

一 本院ノ務ハ立法ノ事ヲ議スルヲ掌ル

一 凡制度条例ヲ創立シ或ハ成規定則ヲ増損更革スル
事総テ議決ノ上之ヲ正院ニ上達スヘシ

なる規定（前掲『法規分類大全』第十九冊・官職門・官制・左院・右院・五―六頁）などにもとづき、「熟議」の結果、司法省伺に添附された同省起案の条例中、「各關訟」を「關訟二」に改める「付紙」を附して正院（太政官）に上達した。

なお、左院が、司法省起案の条例中の「各關訟」を「關訟二」と改める「付紙」を附した理由については、資料を欠き不明である。

（20）正院（太政官）は、左院の上達の「付紙」について可否を決しかね、前掲「太政官職制並事務章程」の中の

正院事務章程

（中 略）

左右両院ノ奏事取捨ノ便宜施行ノ緩急ハ本院ノ特權タリ

なる規定（前掲『法規分類大全』第十冊・官職門・官制・太政官内閣一・一四七一―一四八頁）などにもとづき司法省にこれを下げ渡したものと思われ、これに対する司法省の回答が、この再伺である。

（21）手塚・前掲「明治六年太政官布告第六十五号の効力」一四〇頁。

（22）前掲『法規分類大全』第五十四冊・刑法門・刑律三・二五六頁。

（23）手塚・前掲「明治六年太政官布告第六十五号の効力」一四〇頁。

（24）旧刑法は、殺傷に至らない場合であっても、第四百二十七条第十二号において「妄ニ吉凶禍福ヲ説キ又ハ折棒符咒等ヲ為シ人ヲ惑ハシテ利ヲ図ル者」を「一日以上三日以下ノ拘留ニ処シ又ハ二十錢以上一円二十五錢以下ノ科料ニ処シていた。

（国立公文書館蔵『公文録』明治六年四月・司法省伺・十四）

僧巫咒詛ノ儀ニ付伺

瘋癲等ノ病ニ罹ル者ヲ僧巫ノ從咒詛^{マツマツ}シテ狐狸ヲ駈去スルト忘説^{マツマツ}シ湯火及ヒ白刃等ヲ以テ威逼薰灼シ往々死ニ至ラシムル者アリ文明ノ今日ニ際シ人民ヲ眩惑シ以ノ外ノ惡習既ニ本年一月教部省ノ禁令モ有之居候ヘ共未タ此刑律無之ニ付清律ノ師巫邪術及ヒ妖書妖言等ノ罪絞斬ニ処断スル律ニ依テ別紙条例ヲ起シ相伺候也

明治六年三月廿九日 司法大輔福岡孝弟

司法卿江藤新平

正院御中

(朱書)
伺之通

(朱書)
明治六年四月十三日

魘魅人条例

瘋癲人等ヲ僧巫ノ徒咒咀シテ狐狸ヲ駈去スルト妄説シ湯火及ヒ白刃等ヲ以テ却逼薰灼シ折傷ニ至ラシムルハ各闘傷ニ一等ヲ減シ死ニ致ス者ハ絞

左院附紙

各闘傷ノ三字ヲ闘傷ニノ三字ニ改ムヘシ

司法省僧巫咒咀ノ儀ニ付伺熟議候処別紙条例付紙^(マ)ノ外異存無候也

明治六年三月三十一日 左 院

僧巫咒咀ノ儀ニ付再伺

魘魅人条例の制定に関する一資料(中山)

魘魅人条例本文中各闘傷ノ字面ニ各ノ一字刪ル可キ旨左院^(マ)付紙相成候へ共明清律例殺傷諸条ノ文ニ於テ皆各ノ字ヲ用ル者ハ傷ノ輕重ニ依リ苔杖徒流各々差異有之新律中闘殺傷ニ準スルノ文ニモ亦皆各字ヲ用イ候ニ付原文ノ各字据置可然奉存候此段今又相伺候也

明治六年四月十日 司法大輔福岡孝弟

司法卿 江藤新平

正院御中